

Bulletion of Kagoshima  
Prefectural Archaeological Center

# From JOMON NO MORI

No. 16 CONTENTS

Cave ruins in Kagoshima Prefecture.

Yubasaki Tatsumi

Supplement to the Komaki site and some consideration

The research department of Kagoshima Buried Cultural Property  
Reserch Center

The pit dwelling house which is in the Kofun period excavated  
in Komaki remains in Kagoshima Prefecture

Kawaguti Masayuki

Investigation of Uwai Castle Ruins in Kirishima City

Kurokawa Tadahiro

Study on the route between Satuma koku Taki and Nodae

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the  
4nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center  
October 2023

研究紀要・年報

# 縄文の森から

From JOMON NO MORI

第16号

鹿児島県の洞穴遺跡の集成  
—洞穴遺跡の概要と調査の状況—

湯場崎 辰巳

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討  
(公財)埋蔵文化財調査センター 調査課

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広

薩摩国高城—野田間の道筋について

東 和幸

令和4年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
2023.10

研究紀要・年報

縄文の森から

第16号

二〇二三

鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 『縄文の森から』第16号 目次

---

---

鹿児島県の洞穴遺跡の集成一洞穴遺跡の概要と調査の状況一

湯場崎 辰巳・・・・・・・・ 3

鹿屋市小牧遺跡の補遺と若干の検討

(公財) 埋蔵文化財調査センター 調査課・・・・・・・・ 17

鹿屋市小牧遺跡で検出された竪穴建物跡 (SH20) の性格について

川口 雅之・・・・・・・・ 35

霧島市上井城跡の踏査

黒川 忠広・・・・・・・・ 41

薩摩国高城一野田間の道筋について

東 和幸・・・・・・・・ 49

令和4年度年報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

---

---



# 鹿児島県の洞穴遺跡の集成 — 洞穴遺跡の概要と調査の状況 —

湯場崎 辰巳

Cave ruins in Kagoshima Prefecture.

Yubasaki Tatsumi

## 要旨

筆者は、第31回九州縄文研究会沖縄大会テーマ「洞窟・岩陰遺跡を考える」において、鹿児島県の縄文時代の洞窟・洞穴遺跡を集成する機会を得ることができた。そこで一定程度集成した資料を活用して、縄文時代だけでなく、全時代を通じて、鹿児島県の洞穴遺跡の概要及び調査状況をまとめることとした。

今回の集成で、洞穴遺跡数は、29遺跡（本土16・島嶼部13）が確認できた。縄文時代とされるものが、のべ38遺跡（草創期1・早期6・前期10・中期7・後期9・晩期5）、弥生時代10遺跡、古墳時代4遺跡、古代3遺跡、中世6遺跡、近世2遺跡である。このうち調査・報告なされている遺跡が19遺跡であることが分かった。

キーワード 洞穴遺跡集成 九州縄文研究会 河口貞徳氏 概要 調査状況

## 1 はじめに

筆者は、第31回九州縄文研究会沖縄大会テーマ「洞窟・岩陰遺跡を考える」において、鹿児島県の縄文時代の洞穴遺跡を集成する機会を得ることができた。

鹿児島県の多くの洞穴遺跡は、昭和20～40年代の調査も多く、報告書という形になってない遺跡もある。多くの資料が存在しており、半世紀以上経過しているものも多いため、資料集成では、時間を要する結果となった。そこで、鹿児島県の洞穴遺跡を集成し、一元的にまとめる必要性を感じた。なお、洞穴遺跡の集成や遺跡概要・調査状況等をまとめることを目的としている。

## 2 集成の方法

縄文時代以外の洞穴遺跡の集成も行い、九州縄文研究会で発見できなかった資料等も再度検索して、鹿児島県の洞穴遺跡の調査の成果と概要をまとめることとした。なお、洞窟遺跡という呼び方もあるが、本稿では洞穴遺跡として記載した。また、遺跡名が洞窟としているものはそのまま用いている。ただし、報告書が刊行されている遺跡の名称は、報告書の遺跡名を記載している。

「3 発掘調査等が実施されている各洞穴遺跡の概要」の項にて、発掘調査等が実施されている各洞穴遺跡の位置と立地、調査の経過、主な遺構・遺物、参考・引用文献についてまとめたい。ただし、遺跡によっては、不明な部分も多いため、分かった範囲で記載している。また、参考・引用文献には、今回1次資料を確認できないものもあったが、分かる範囲の文献名を記載している。

「4 周知の埋蔵文化財包蔵地であるが発掘調査及び報告がない洞穴遺跡」の項にて、発掘調査は実施されていない周知の埋蔵文化財包蔵地の洞穴遺跡を記述する。なお、参考データは、鹿児島県埋蔵文化財データベース

を主に活用している。

## 3 発掘調査等が実施されている各洞穴遺跡の概要

### (1) 黒川洞穴（くろかわ）

#### ① 遺跡の位置と立地

日置市吹上町永吉に位置し、永吉川の支流の二俣川の浸蝕によってできた、谷の北斜面に存在している。遺跡付近は、凝灰岩またはシラス層からなり、80～100mの高さに断崖が形成されている。これらの断崖の基部に、水食によって洞穴が形成されている。黒川洞穴は、西海岸より6.5m、標高84mに大小2個の洞穴が隣接して開口している。西側の大洞穴（西洞穴）は、シラスと凝灰岩からなり、入り口の幅は13.3m、高さは4.35m、奥行きは深い落盤のため不明である。黒川洞穴に接して東側（東洞穴）に、入口幅11m、高さ4.35m、奥行き8.4mの馬蹄形の小洞穴がある。この洞穴はシラス層に作られ、天井中央には円筒形の浸蝕穴がある。西方90mに、元権現洞穴がある。標高79.5mに開口、入口幅21.65m、高さ21.65m、奥行き17mある。

#### ② 調査の経過

黒川洞穴は、昭和27（1952）年に坊野小学校教諭辻正徳氏の連絡で、河口貞徳氏が発掘調査し、縄文時代晩期の黒川式土器を初めて発見している。

昭和39（1964）年、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会により、江坂輝弥氏・河口貞徳氏が11月18日から7日間、発掘を行っている。期間中に、新潟大学の小片保教授が埋葬遺構の調査に当たっている。次に昭和40（1965）年8月14日より7日間の発掘調査を行っている。これらは主に東洞穴の調査で、昭和42（1967）年7月29日より11日間、西洞穴の発掘を行っている。平成16（2004）年に県の史跡に指定されている。

### ③ 主な遺構・遺物

遺構では、縄文時代とされる土坑群15基が昭和39（1964）年から昭和40（1965）年に行われた調査で発見されている。昭和27（1952）年の調査の際には、住居跡や周溝と報告（河口1952）されており、周溝に多くの土坑が重なっていることを指摘している。その中に、炉跡と埋葬跡（3号土坑）が含まれている。炉跡は、礫を52×46cmの範囲に敷きならべ、炉壁横壁に幅20cm、長さ30cm、厚さ7cmの石が配置され、土留めとされている。時期は層位から縄文時代晩期（黒川式土器）の時期としている。3号土坑は東西径90cm（南北は不明）、深さ40cmで、人骨は熟年女性とされる。土圧を受けて、土坑床面に密着し、頭部を西方向に側臥屈葬されており、骨盤が洞部下に、尾てい骨は頭部の下に移動しているという特異な埋葬方法とされている。

縄文時代前期では甕式土器が出土している。東洞穴のシラス層直上のシラス再堆積層から出土したものとされている。また、縄文時代晩期では標式土器である黒川式土器が出土した遺跡であり、東洞穴の上層での出土が多いとされている。

### ④ 参考・引用文献

河口貞徳1952「黒川洞窟発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会

河口貞徳1967「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会 平凡社

河口貞徳1967「黒川洞穴」『考古学ジャーナル』第13号 ニュー・サイエンス社

河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会1981「河口貞徳先生古稀記念著作集」

鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

※黒川洞窟と黒川洞穴両方の記録があったが、本稿では、県指定史跡の登録名で記載した。

## （2）権現洞穴（ごんげん）

### ① 遺跡の位置と立地

権現洞穴は、南九州市山川辺町上山田君野に位置している。溶岩洞穴で、表面がかたまりかけた溶岩の中から熱い溶岩が抜けた後が洞穴になってもので、県内唯一のものとして、昭和29（1954）年に県の天然記念物に指定されている。

入り口が広さ2m、高さ1.3mの長方形をしていて、全長41.5mの水平な横穴で、洞穴に入るとすぐに大広間となっている。周辺からは土器や石器の破片が発見されており、先史の時代の住居として使用されていた可能性が指摘されているが、具体的な時期については不明である。

### ② 参考・引用文献

鹿児島県教育委員会HP

南九州市教育委員会2006君野権現洞穴現地案内板

※南九州市HPでは、君野権現洞穴と紹介されている。

## （3）福元洞窟（ふくもと）

### ① 遺跡の位置と立地

指宿市山川町福元の山川港崖下に位置する。大岩崖の半洞窟状を呈する崖下であり、火口壁上層からの風化土壌で落盤等が見られる。太平洋戦争で防空壕として利用・削平され、その後、道路工事で土砂が採取されたため、遺物包含層が露出したとされている。

### ② 調査の経過

昭和27（1952）年の9月21日から3日間、国分直一氏、指宿高等学校重久十郎氏と指宿高等学校郷土研究部の生徒により、調査されている。

調査可能範囲は3m×3m前後で、落盤と包含層中に岩石が混じっており、発掘は困難な状況であったようである。そのため、間口2.7m・奥行3.1m・奥壁幅約1m前後の深さを3.4mの掘り下げを第1～第3次に分けて、調査を行っている。

### ③ 主な遺構・遺物

表土から60～70cmと110～120cm下層では、2体の人骨が発見されている。これは、近代の風葬とされている。また、170～180cm下層では、頭位を南西、足位を北東にして、側臥伸展葬の女性の人骨が発見されており、30歳未満とされる。副葬品として、瑞花双鳳八稜鏡や剣鞘の足金物とされる鉄製品と剣身の小片の出土が報告されている。なお、伸展葬から深さ63cm・厚さ8cmの灰層があり、焼けた獣骨4片と未焼の獣骨1片が出土している。鏡の出土から、古代の埋葬跡と推定されている。その他の遺物は、表土から60～80cm下層で、鉄屑1片、鉄釘4、鉄製鏃1、鉄片1、近代陶片が出土している。140～170cm須恵器・弥生土器・縄文土器（市来式土器）や砥石・石皿などの出土が報告されている。

### ④ 参考・引用文献

国分直一1955「鹿児島県山川港に於ける崖葬」

『水産講習所研究報告』人文科学編第1号

山川町2000「山川町史増補版」

## （4）山内洞窟（やまうち）

### ① 遺跡の位置と立地

山内洞窟は枕崎市東鹿籠竹之迫山内の山林内に位置する。中州川上流添いの溪谷に、自然の浸食によって安山岩の崖に4つの穴ができた遺跡である。『枕崎市誌』や報告書では、洞穴と紹介しているものもある。

本稿では鹿児島県埋蔵文化財データベースに従って洞窟とした。

### ② 主な遺構・遺物

洞窟自体が弥生時代後期の住居跡とされ、甕形土器の破片や、磨製の短冊形で1.5cmの厚さの青色の石器が報告されている。

### ③ 参考・引用文献

枕崎市1990『枕崎市誌』上巻 枕崎市誌編さん委員会

## (5) 日木山洞窟 (ひきやま)

日木山洞窟については、関一之氏の記述(関2005)から引用、一部改変している。

### ① 遺跡の位置と立地

日木山洞窟は、加治木駅から東に約650m離れた地点に位置し、旧加治木町と旧隼人町を結ぶJR日豊線の日木山トンネルの近くに所在する。洞穴は、標高約20mの山腹にあり、急峻に立ち上がる凝灰岩の崖部の境に形成されている。洞穴の前にはテラス状に開けた土地があり、北側には、日木山の山塊が連なり、南側には鹿児島湾を望むことができる。東側は旧隼人町との境界に近く、西側には、日木山川や網掛川の堆積作用により形成された沖積平野が開けている。

海水による浸食と隆起により形成されたものと推測され、洞窟の平面形は、幅1.97~2.2m、全長8.8mの東南に開口した細長い形状を呈しており、高さは入り口付近で約2.5m、奥は袋状に広がり最高3.4mである。土層は3層に分けられて、第1層は、厚さ25cmの灰白色火山灰。第2層は、厚さ約30cmの黒褐色を帯びた火山灰層。第3層は、厚さ約20cmの海浜砂層と報告されている。

### ② 調査の経過

昭和12(1937)年に始良市加治木町出身の野田昇平氏が日木山洞窟で採集した資料を持って、樋口清之氏を訪れている。樋口氏は乙益重隆氏と共に発掘調査を行っている。発掘調査に費やした日数は2日間で、面積約1㎡のトレンチを洞穴内に2か所設けて調査を行っている。また、両氏の調査の数日前には、三森定男氏が踏査を、発見者である野田氏が発掘を行っているようであるが、概要は不明である。

### ③ 主な遺構・遺物

遺物は主に第2層から出土しており、土器や礫のほか多数の貝殻や骨片が出土しており、焚き火の跡と思われる焼土や木炭が水平に検出されている。この時の調査報告書によれば、出土した土器は全て同時期の資料で、条痕文、点線文、相交弧文の3つに分類して「日木山式土器」として型式が設定されている。これは、鹿児島県枕崎市深浦遺跡で出土した土器をもとに、小林久雄氏・住谷正節氏により設定された深浦式土器(小林・住谷1940)の日木山段階として、縄文時代前期末から中期前葉の土器として、型式の細分が定着している(柴畑光博1986・1993・1997、池田朋生1995・1998、相美伊久雄2000・2006)。

出土品には、多量の自然遺物が含まれ、貝類はハマグリ、コシダカガンガラ、ウミニナ等の鹹水産で、炭化したカニ類のツメも見られる。また、哺乳類の動物骨は、シカ、イノシシに属するものが報告されている。

### ④ 参考・引用文献

樋口清之・乙益重隆1937「鹿児島県加治木日木山洞窟遺跡の研究」『史前学雑誌』第10巻第2号 史前学会

関一之2005『先史・古代の鹿児島(資料編)』鹿児島県教育委員会P241・P242

### ※ 深浦式土器関係

小林久雄・住谷正節1940「薩摩國枕崎市花渡川遺跡」『考古学』東京考古学会

柴畑光博

1986「南九州縄文時代前期末土器群の編年予察-大龍遺跡出土土器群の検討-」『AMAME』4

1993「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉のどきについて」『鹿児島考古』27号鹿児島県考古学会

1997「第四節文化交流の進展(前期~中期)」『宮崎県史 通史』原始・古代1

相美伊久雄

2000「深浦系土器の再検討」『人類史研究』12人類史研究会

2006「条痕文土器と縄文施文土器-南九州における縄文時代前期末~中期前葉土器群の再整理-」『大河』8号 大河同人

## (6) 鍋谷洞窟 (なべたに)

### ① 遺跡の位置と立地

鹿児島市吉田町と始良市との境に接する始良市平松にあり、思川と本名川の合流地点から、本名川の上流に向かって直線距離1.2kmの本名川右岸にある。遺跡は、カオリン鉱山の鉱区内にあった。

一般地方道鹿児島蒲生線から本名川右岸の岩石の露出した絶壁を川下方向から登ると、川面から10m、標高50mの壁面に位置する。岩棚の入口は13.3m・高さ2.7m・奥行き3.4mで、半月状に入り込んだ自然の洞穴とされている。

### ② 調査の経過

カオリン鉱山の鉱山主の連絡によって遺跡が判明し、河口貞徳氏が昭和35(1960)年に調査を行っている。

### ③ 主な遺構・遺物

少量の貝殻と獣骨が出土している。

土器は、多くが塞ノ神式土器で、塞ノ神A b式・B d式・無文土器とされる。また、ミミズばれ状の凸帯を巡らす、轟式土器の出土も報告されている。

なお、塞ノ神式土器の再編を試みた新東晃一氏によって、貝殻文系から撚糸文系への流れから、三代寺式土器→塞ノ神式土器→鍋谷式土器とすることが提唱されており、鍋谷式土器の標式遺跡となっている。

### ④ 参考・引用文献

河口貞徳1951「南九州の縄文土器」『日本の古代遺跡』38鹿児島 保育社

新東晃一1988「塞ノ神式土器再考」『永井昌文教授退官記念論集』

河口貞徳1993「鍋谷洞穴」『鹿児島考古』33鹿児島県考古学会

吉田町1991『吉田町郷土誌』吉田町郷土誌編纂委員

## (7) 鍋倉洞窟 (なべくら)

### ① 遺跡の位置と立地

鍋倉洞窟は、始良市鍋倉に位置し、高さ数丈、深さ数十間とされる岩窟である。奥深い巨大なもので、十数人の家族が雨露をしのいで住居とするには十分の広さがあるとされる。

### ② 調査の経過

昭和14(1939)年に寺師見國氏や加治木町出身の野田昇平氏ら諸氏が調査を行っている。報告書の形では、発表されていないが、当時の調査メモが残っており、始良町郷土史にその全文が記載されている。

### ③ 主な遺構・遺物

縄文時代後期の市来式土器や西平式土器、貝類や鳥獣魚骨類が出土したとされている。4.5km離れた日木山洞穴と比較して、そのあり方を考察している(始良町1995)。また、洞窟入口付近の壁面には室町時代から江戸時代に彫られたとされる天福寺磨崖仏が残っている。

### ④ 参考・引用文献

始良町1995『始良町郷土史』始良町郷土誌改訂編さん委員会

始良市2019『始良市誌』第1巻先史・古代編自然編始良市誌編集委員会

## (8) 口輪野 (くちわの)

### ① 遺跡の位置と立地

霧島市国分の敷根海岸より直線距離にして4km、標高200mの山地で、口輪集落から東南方向にあたる水源付近に位置する。シラス台地が谷頭浸食を受けて絶壁となり、この壁面に地下水の浸食によって生じた洞窟と、100m西側にあたる農道建設によって発見された遺跡である。入口は半円状をしており、幅2.52m、高さ1.54mで内部はやや広くなり、幅3m、高さ2mになる。

### ② 調査の経過

昭和34(1959)年の8月13日～16日に、河口貞徳氏・上野敏雄氏・和田光司氏・麓川昭憲氏により、発掘調査されている。主に農道建設によって発見された箇所での調査で、洞窟部分は最終日のみの調査である。

### ③ 主な遺構・遺物

洞窟は狭くなって奥へ続いており、入口より4m付近に住居跡とされる。洞窟東側壁沿いに礫の配列があり、西側にも礫があったとされ、石組とされている。床面中央には、木灰の堆積がみられ、貝殻・獣骨が混じり、縄文時代晩期の土器片や弥生時代前期の甕形土器が出土している。完形品の土器が出土しており、口縁部は外反し、肩部に2条の沈線と重弧文が施される。

### ④ 参考・引用文献

日本考古学協会編纂1959「鹿児島県口輪野遺跡」『日本考古学年報』12 誠文堂新光社

## (9) 中岳洞穴 (なかたけ)

### ① 遺跡の位置と立地

曾於市末吉町の標高約290mの大淀川上流の枝谷に位置し、東北東に開口し、シラス層に穿かれた水蝕洞窟で、シラスと凝灰岩からできている。入り口幅5m、高さ2m、奥行き9mである。前面の渓流水面との比高は約6mで、渓流の水は四季をとおして、枯れることがないようである。

### ② 調査の経過

昭和44(1969)年に町内遺跡調査で発見されている。末吉町教育委員会により、昭和53(1978)年から第4次にわたり発掘調査が行っている。

### ③ 主な遺構・遺物

集石炉・土坑など、長期に及ぶ生活の跡を残しており、落盤に覆われて、調査できなかった箇所も、遺跡の存在が推定されている。遺物では、西平式土器や三万田式土器・御領式土器・入佐式土器・黒川式土器などが出土している。後期後葉の中岳式土器の標式遺跡である。

### ④ 参考・引用文献

末吉町教育委員会1980『中岳洞穴』遺跡調査報告書  
鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島(資料編)』

## (10) 花房峽助七洞穴遺跡 (はなふさきょうすけなな)

### ① 遺跡の位置と立地

曾於市末吉町に位置あり、安楽川がつくる北面急斜面で川から約10mの高低差がある。洞穴は自然洞穴で、間口6.5m・奥行17.5m・高さ1.5mのドーム状を呈している。シラスが堆積しており、その面を生活面として利用している。

### ② 調査の経過

南之郷にある花房峽を町民のレクリエーションと交流の場として、憩いの森として整備するため、末吉町教育委員会が平成3(1991)年に確認調査と平成5(1993)年に発掘調査をおこなっている。

### ③ 主な遺構・遺物

平成3(1991)年の調査では、土坑2基と土坑内から約30点の土器片が出土している。土器は黒川式土器とされている。平成5(1993)年の調査では、焼土が4基検出されている。遺物は土器片が出土しており、黒川式土器の浅鉢が出土している。

### ④ 参考・引用文献

末吉町教育委員会1992『花房峽助七洞穴遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)  
末吉町教育委員会1993『花房峽助七洞穴遺跡』(2)末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

## (11) 片野洞穴 (かたの)

### ① 遺跡の位置と立地

志布志市志布志町の中心部から北に約11km離れた市

道中川内線と林道中川内27号支線が、交差する地点の北側の谷に位置している。遺跡は南向き斜面に開口した標高100mにある水蝕洞穴で、シラス層と凝灰岩で形成された洞穴である。洞穴の入口付近は幅約12m、高さ4mあり、奥行きは入口から約19m付近で、幅は約5mに狭まり、高さも低くなるが再び広くなり、幅約8m、入口から45～46m付近は幅約20mで高さも急に大きくなる。

#### ② 調査経過

昭和39（1964）年に旧志布志町が志布志町誌編纂の一環として、志布志町教育委員会と町誌編纂委員会が発掘調査を実施している。

#### ③ 主な遺構・遺物

縄文時代前期・後期・晩期・弥生時代の複合遺跡である。堆積層は厚狭雑多であり、Ⅱ・Ⅲ層が西平式土器、Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層（粗粒シラス）が轟式土器、曾畑式土器が出土している。轟式土器の細分と曾畑式土器の位置づけが明確になった遺跡でもある。後期の遺物として、骨角器として筭（こうがい）や牙製釣針、彩色石器が出土している。遺構では、前期の配石遺構（敷石住居？）、後期の配石遺構（住居？）・排水施設などが検出されている。

#### ④ 参考・引用文献

- 河口貞徳1967『鹿児島県片野洞穴』『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会 平凡社志布志町1979『志布志町町誌』  
河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会1981「河口貞徳先生古稀記念著作集」  
鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

### (12) ホンドンガマ

#### ① 遺跡の位置と立地

鹿屋市申良町細山田にあり、字下中の霧島神社のある標高70mの独立丘陵の下辺に位置する。火山噴出物（シラス）を基盤とし、奥行18m・入口幅9m・高さ4mの洞穴遺跡である。

#### ② 調査経過

昭和51（1976）年に鹿児島県教育委員会は文化庁の補助を受けて、大隅地区の分布調査を実施している。調査報告書（鹿児島県教育委員会1977）には、調査は昭和48年度と記載されている。

#### ③ 主な遺構・遺物

縄文土器・弥生土器・土師器の採集が記載されている。なお、鹿児島県埋蔵文化財データベースでは、縄文時代のみとされている。

#### ④ 参考・引用文献

- 鹿児島県教育委員会1977「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(6)

### (13) 塩屋阿獄（しおやあだけ）

#### ① 遺跡の位置と立地

種子島の熊毛郡中種子町坂井塩屋片白にあり、熊野海岸の南端の阿獄川（全長4.5km）河口近くの砂浜に約10m余りにおよぶ軟質の砂岩の岩山に位置している。洞穴は海側に面しており、幅約15m・入口の高さ3.5m・奥行き約5mである。「阿獄の洞穴（あだけのほらあな）」とも呼ばれており、昭和56（1981）年に町指定文化財（史跡）に指定されている。

#### ② 調査経過

1958(昭和33)年に国分直一氏・盛園尚孝氏が地元の協力により発掘調査を実施している。遺物包含層は、2m四方の区割りで調査を進めているが、奥は腹ばいで調査したとされている。

#### ③ 主な遺構・遺物

上層からは約30種類の貝類が出土しており、獣骨、魚骨（ウニ・ガザミ等）が多く出土したとされている。石器は、打製石斧や凹石などが出土している。土器は弥生時代の甕形・鉢形土器が主で、前期から中期のものとなっている。一時的な仮の住居跡の可能性が推定されている。

#### ④ 参考・引用文献

- 中種子町1971『中種子町郷土誌』中種子町郷土誌編集委員会

### (14) アナバイトフル

#### ① 遺跡の位置と立地

奄美大島の奄美市笠利町大字手花部にある。

#### ② 主な遺構・遺物

横2m・高さ1.2mの半円形で、納骨堂として利用されていた。トフルは、南西諸島の独特の墓制で、風葬の一つである。

昭和46（1971）年に、旧笠利町の史跡となっている。

#### ③ 参考・引用文献

- 手花部老人クラブ案内板

### (15) イャンヤ洞穴（土浜ヤーヤ洞穴遺跡）

#### ① 遺跡の位置と立地

大島郡笠利町にあり、奄美大島の東河岸の南に位置し、河岸段丘山手側の洞窟にある。西側山手に開口し、北側は東西にのびる谷になっており、東側は台地状になっている。標高約20mで、洞窟内部は開口部分が約10m、奥行き約13mあり、天井は落盤している。石灰岩でできており、昭和50（1975）年頃までは風葬墓として利用され、人骨などが散乱していた。なお、奄美諸島で初めて旧石器時代の遺物が発見された土浜ヤーヤ遺跡は、イャンヤ洞穴の北側約150mに位置している。

#### ② 調査経過

昭和8（1933）年に、風葬墓としての人骨調査を三宅宗悦氏が行っている。昭和38（1963）年には、熊本



日日新聞社による南島学術調査団（団長松本雅明氏）が編成され、永井昌文氏や三島格氏が調査を行っている。昭和62（1987）年に県道工事のため洞窟の北西約200mが発掘調査され、旧石器時代の遺物が出土して話題になっている。笠利町誌には土浜ヤーヤ洞穴遺跡となっているが、ヤーヤ洞窟遺跡をイヤンヤ洞穴としたのはイヤンヤを「岩屋」と方言で呼んでおり、三島格氏にも確認をしたとされている（鹿児島県教育委員会2005）。

### ③ 主な遺構・遺物

昭和38（1963）年の発掘調査では洞窟の層序は1層と2層に大別されている。出土遺物はゴホウラ製貝輪、弥生系土器と爪形文土器、条痕文土器などが出土している。爪形文土器は1層と2層から出土している。1層出土は13点、2層出土は39点を数える。

### ④ 参考・引用文献

- 永井昌文・三島格1964「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』第5巻第2号 日本考古学会笠利町1973『笠利町誌』笠利町誌執筆委員会  
中山清美1992「イヤンヤ洞窟遺跡出土の爪形文土器」『奄美考古』3号 奄美考古学会  
木下尚子1996「イヤンヤ洞窟のゴホウラ貝輪」『奄美考古』4号 奄美考古学会  
鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

## (16) ウンブキ水中鍾乳洞

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡天城町浅間にあり、海岸線から内陸に500mほどの標高8m前後の石灰岩台地上に長さ42m、幅16mほどの陥没ドリーネが口を開けており、この陥没ドリーネの西側崖面に水中鍾乳洞が開口している。サンゴ礁が隆起して雨水などにより鍾乳洞が形成され、さらに沈下もしくは海面上昇により水中に没した洞穴と考えられている。鍾乳洞は入口から西側に700m続いていることが確認されており、海岸線を越えて、海底の地下まで続いているものとされている。

### ② 調査経過

平成30（2018）年から調査されており、平成31（2019）年、水中探検家の広部俊明氏により、国内最大の海底鍾乳洞となっている。

### ③ 主な遺構・遺物

出土した土器には、下原洞穴の7,000年以前の地層から出土した土器と共通する波状条線文の文様が施されている。

### ④ 参考・引用文献

- 天城町文化財データベース

## (17) 下原洞穴遺跡（したばる）

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡天城町にあり、海岸から約500m内陸に位置し、開口部は標高約90m、幅約27m、高さ1～5mで

西に向かって、開口している。洞穴前面には、直径約60mの陥没ドリーネが広がる。堆積層はI層～VI層の遺物包含層が確認され、I層～IV層は石灰岩礫・カタツムリ殻・土器等を含む、シルト～粘土とされる。各層の炭化物年代測定値は、II層5,208～4,959calBC、III層上層5,466～5,032calBC、III層下層5,486～5,222calBC、IV層15,006～8,349calBC、V層28,701～27,276calBCと報告されている。

### ② 調査経過

3次にわたる発掘調査が実施されている。平成28（2016）年に、先史時代人骨の発見を目的として、天城町教育委員会と鹿児島女子短期大学と共同での学術調査が実施されている。その後、平成29（2017）年～平成30（2018）年に、天城町教育委員会が主体で鹿児島女子短期大学の協力を得て、発掘調査を実施している。

### ③ 主な遺構・遺物

縄文時代中・後期（貝塚時代前3期）頃の墓跡や、南島爪形文土器の下層から新たな土器が複数型式出土しており、南島爪形文土器以前に土器文化があったことが示されている。地層の放射性炭素年代測定から、17,000～10,000年の前の結果が出ていることから、奄美諸島の土器の起源を大きく遡る可能性が指摘されている。また、貝塚時代前1期の磨製石鏃が多く出土し、製作工程の各段階の遺物や、工具と考えられる石錐・砥石なども出土しており、磨製石鏃の製作跡と報告されている。

### ④ 参考・引用文献

- 天城町教育委員会2020『下原洞穴遺跡・コウモリイヨー遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

## (18) コウモリイヨー遺跡

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡天城町にあり、下原洞穴遺跡から約200m南側に進んだ同じ段丘崖に形成されており、海岸部から約500m内陸に位置し、洞口は幅約10m、高さ5mほどとなっている。下原洞穴遺跡やコウモリイヨー遺跡が立地する段丘崖は、南北におおよそ1.2kmに渡って続いており、確認できていない洞穴が多数存在する可能性がある。両遺跡が立地する下原地区の段丘基盤は、琉球石灰岩でおおよそ40～50mで地層が変化する。下層には秋利神川層があり、その岩層は頁岩と砂岩が互層を主としており、そこから磨製石鏃の石材となる粘板岩が含まれている。

### ② 調査経過

平成28（2016）年に、天城町教育委員会が主体で鹿児島女子短期大学の協力を得て、発掘調査を実施している。

### ③ 主な遺構・遺物

面縄前庭式土器、曾畑式土器、南島爪形文土器などが出土しており、縄文時代早期～中・後期（貝塚時代前1期～前3期）の時代が中心とされている。

### ④ 参考・引用文献

- 天城町教育委員会2020『下原洞穴遺跡・コウモリ

## (19) ヨヲキ洞穴

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡伊仙町にあり、町の中心地より約2.5km離れた通称イキントウと呼ばれる台地の森にある。標高約160mで尺八池の南側にあり、北西に開口する洞穴は約22mの所で、ほぼ垂直に南西へ進み、約30mの所で幅、高さとも約1mの出口となり、周辺の国有林野内には、中世の一大生産供給地であるカムイヤキ古窯跡群が所在する。ヨヲキとは方言で「ヨヲ＝横穴」「フキ＝竪穴」のことであり、洞穴を表す言葉である。洞穴の大きさは入口が幅約12m、高さ約6mで最も幅の広い所が約12m、狭い所が約6mである。高さは最も高い所が約8m、低い所が約3mである。琉球石灰岩が溶食によってできた鍾乳洞であり、岩盤は輝石安山岩である。

### ② 調査経過

昭和59（1984）年にカムイヤキ古窯跡周辺の分布調査を行っていた義憲和氏によって発見された洞穴である。昭和60（1985）年に伊仙町教育委員会によって発掘調査が実施されている。

### ③ 主な遺構・遺物

縄文時代の遺物としては、条痕文、面縄東洞式、面縄前庭式、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器が出土している。縄文後期から弥生時代相当期の壺形土器、甕形土器、貝類、魚骨、獣骨、甲殻類（カニ）などの遺物が出土している。貝鏃は本土の弥生時代によくみられる磨製石鏃に類似しているものである。また、サメ歯加工品の完形品が出土しており、加工品としては、薩摩川内市の麦之浦貝塚の出土品1点のみである。12～13世紀頃の陶質土器がまとめて出土しており、この上で火を焚いたとされており、750±70B.Pの年代値が報告されている。

### ④ 参考・引用文献

伊仙町教育委員会1986『ヨヲキ洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（6）

鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

## (20) 面縄貝塚（おもなわ）

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡伊仙町面縄にあり、伊仙町中心地より東に約3km離れた面縄川が兼久浦の浅い小湾に注ぐ袋状地形で、海岸に面した標高6m程の砂丘上、石灰岩丘陵上、隆起珊瑚礁の崖下に形成された貝塚で、第1～第4貝塚までが周辺に所在する。そのうち、第1貝塚と第3貝塚・第4貝塚に洞穴が存在している。第4貝塚は、面縄小学校の北約120mの伊仙町西兼久に所在し、隆起珊瑚礁崖の洞穴とその前方に続く棚状の前庭部からなっている

### ② 調査経過

昭和3（1928）年大村行信氏によって発見されている。昭和5（1930）年に廣瀬祐良氏が、鹿児島県史蹟

調査委員の山崎五十磨氏に、面縄に石器時代遺跡が存在することを伝え、山崎氏の指示により発掘調査を行っている（山崎1930）。昭和5（1930）年と翌年に徳之島を訪れた小原一夫氏が、面縄尋常高等小学校の裏手畑地に新たな貝塚を発見し、廣瀬氏によって調査された貝塚を「面縄第一貝塚」、新たに発見した貝塚を「面縄第二貝塚」として、両遺跡の発掘調査を行った（小原1932）。河口氏は奄美群島日本復帰後の1954（昭和29）年に面縄第一貝塚と面縄第二貝塚の調査を行った。その際に面縄小学校校庭遺跡と面縄第二貝塚の東約200mの雑林内に、兼久貝塚を発見している。同年に三友国五郎氏と国分直一氏は、面縄第二貝塚の調査を行い面縄貝塚の北側に、2つの小貝塚を発見して、兼久貝塚は、面縄第三貝塚、2つの小貝塚は第四貝塚、第五貝塚と命名された。

昭和30（1955）年から昭和32（1957）年の3年にわたり、九学会連合奄美大島共同調査委員会による共同調査が実施されている。考古班は昭和30（1955）年に宇宿貝塚、昭和31（1956）年には徳之島を対象地域として主に面縄第二貝塚、面縄第四貝塚の発掘調査を行っている。この時に、面縄第四貝塚と面縄第五貝塚は、面縄第四貝塚にまとめられている。

昭和57（1982）年からは、面縄貝塚の概要把握を目的として、伊仙町教育委員会を主体とする再調査が行われている。昭和59（1984）年には面縄第3貝塚の確認調査が実施されている。当初は所在地の小字をとって、兼久貝塚と呼ばれていたが、後に面縄第3貝塚となり、兼久式土器の標識遺跡となっている。これらの確認調査によって遺跡の範囲が拡大し、埋蔵文化財の包蔵状態が良好であることが判明している。（伊仙町教育委員会1986 本報告書から貝塚名にアラビア数字が用いられた。）平成12（2000）年には、面縄小学校改築に伴って面縄第2貝塚の緊急調査が実施された。（伊仙町教育委員会2014）また、平成19（2007）年から2015（平成27）年には、遺跡の範囲と内容を把握する確認調査が実施され、各時期における遺跡の立地の変遷と形成を確認している。

### ③ 主な遺構・遺物

昭和初期より多くの研究者によって調査・報告がなされ、土器型式（面縄前庭式・面縄東洞式・面縄西洞式・宇宿下層式の細分など・兼久式）等南西諸島の考古学の基礎となっている。遺構では、面縄第1貝塚洞穴内の石棺墓（人骨2,560±20BP）や、集石遺構・竪穴遺構等が報告されている。面縄貝塚全体が、平成29（2017）年に、国の史跡に指定されている。

### ④ 参考・引用文献

山崎五十磨1930「鹿児島県大島郡徳之島町面縄貝塚に就て」『考古学雑誌』第20巻第10号日本考古学会  
小原一夫1932「奄美大島群島徳之島貝塚に就て」

『史前学雑誌』4巻3・4号史前学会

国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三

1959「奄美大島の先史時代」『奄美 自然と文化  
論文編』九学会連合奄美大島調査委員会  
伊仙町教育委員会1985『面縄貝塚群』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)  
河口貞徳1996「面縄前庭式土器」『日本土器辞典』  
雄山閣出版株式会社  
鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島(資料編)』  
伊仙町教育委員会2014『面縄貝塚群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)  
伊仙町教育委員会2016『面縄貝塚-総括報告書-』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)

## (21) 中甫洞穴(なかふ)

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡和泊町にある。ドリーネの1つで、標高約100mで、森林に覆われた径約70mの窪地であり、南東と北西の2か所に地下の鍾乳洞に通じる洞穴が開口しており、規模の大きい北西側の洞穴が中甫洞穴である。石灰岩層を多量に含み、珊瑚礁が風化した土壌で風化が著しい。

### ② 調査の経過

昭和57(1982)年8月、河口貞徳氏は和泊町誌先史時代執筆の依頼を受け、沖永良部島和泊町の先史時代遺跡の分布調査と資料収集のため町内を踏査している。その際に、住民が採集したという遺物を見る機会があり、採集地である中甫洞穴の存在を確認している。遺物の中には弥生中期や縄文前期に該当すると思われる土器片のほか、南島爪形文土器の存在を確認している。このため、中甫洞穴遺跡は南島の縄文時代後期以前の様相の解明に寄与する極めて重要な遺跡であるとし、河口貞徳氏・本田道輝氏・瀬戸口望氏が、同年に自主的な発掘を行っている(第一次調査)。その後、知名町教育委員会は中甫洞穴の重要性から、翌年の昭和58(1983)年に国や県の補助を受け、第二次の発掘調査を、昭和59(1984)年には第三次の発掘調査を実施している。各調査とも、河口氏を発掘調査の総括として、本田氏・瀬戸口氏が発掘調査に参加している。

### ③ 主な遺構・遺物

連点波状文・南島爪形文・連点波状文・条痕文・轟式土器など、縄文時代早期・前期の土器が出土しており、遺構では、縄文時代の土坑及び縄文時代や弥生時代とされる人骨が発見されている。その他、南九州の弥生時代後期の土器等を確認されており、沖永良部島の歴史が縄文時代前半に遡ることや、南九州との関わりが明らかにされている。平成30(2018)年に県の史跡に指定され、令和2(2020)年に出土品が県の有形文化財に指定されている。

### ④ 参考・引用文献

河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望1983「中甫洞穴」『鹿児島考古』第17号鹿児島県考古学会

知名町教育委員会1984『中甫洞穴』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1984  
知名町教育委員会1985『中甫洞穴』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)  
知名町教育委員会1986『知名町埋蔵文化財分布調査外報-昭和60年度-』知名町文化財報告書(5)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2019『吐噶喇・奄美の遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(200)

## (22) イクサイヨー洞穴

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡知名町にあり、遺跡は森林に覆われており、巨大な石灰岩が露出しており、北西側と南島側の2か所に地下への鍾乳洞へ通じる洞穴が開口している。北西側の洞穴は小規模で、開口部は狭く、洞穴の全長は約200メートルで天井の高さは約1~2メートル程度とされる。南東側の洞穴は規模が大きく、イクサイヨー洞穴と呼ばれるもので、太平洋側へ面して大きく開口している。遺跡直下は断崖絶壁で、海岸へ下りることはできない。

### ② 調査の経過

昭和59(1984)年に地元の大山倭氏により、発見され、貝輪、土器等が採集された。「県営畑地総合改良事業」や、大規模な開発が進められており、埋蔵文化財包蔵地の保護に懸念が生じていた。そこで、知名町教育委員会では、遺跡の性格、範囲を確認する目的で分布調査を企画し、昭和60(1985)年に鹿児島県教育委員会と協議し、分布調査を依頼し、実施している。近年では、平成30(2018)年度から始まった文部科学省科研費研究プロジェクト・新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」において、「古人骨新資料発見への取組と既出土人骨の資料化による南九州南西諸島域の人類史の解明」という研究が採択され、沖永良部島の先史人骨の新たな発見が期待できる可能性があることから、鹿児島女子短期大学・鹿児島国際大学・知名町教育委員会により、令和2(2021)年~令和3(2022)年に発掘調査が実施され、その成果が調査の成果が速報として報告されている。

### ③ 主な遺構・遺物

洞穴内には3か所に棚段が設けられ、人骨などが散在しており、他に土器、貝輪、石斧などが採集されている。

### ④ 参考・引用文献

知名町教育委員会1986『知名町埋蔵文化財分布調査外報-昭和60年度-』知名町文化財報告書(5)  
竹中正巳・大西智和・鐘ヶ江賢二・宮城幸也 2022  
「沖永良部イクサイヨー洞穴追跡発掘調査速報」  
『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』19

## (23) 永良部洞(えらぶどう)

### ① 遺跡の位置と立地

大島郡知名町にあり、海岸線より約3.6kmの内陸部

に位置する。永良部洞は、島の最高峰大山（標高約240m）周辺に数多く見られるドリーネの一つである。遺跡地は森林に覆われ、点々と石灰岩が露出しており、北東の方向へ開口している。入口幅15m、高さ7mで、地下水の流れに沿って西方向へゆるい勾配で下り約400mで出口に達する。入口と出口の高低差少なく、洞内は入口付近の鍾乳石は発達している。洞内鍾乳石・石筍群は特に巨大なものではなく平均している。約50m内部まで遺物の散布が確認されている。

#### ② 調査の経過

「県営畑地総合改良事業」や、大規模な開発が進められており、埋蔵文化財包蔵地の保護に懸念が生じていた。そこで、知名町教育委員会では、遺跡の性格、範囲を確認する目的で分布調査を企画し、昭和60（1985）年に鹿児島県教育委員会と協議し、分布調査を依頼し、実施している。

#### ③ 主な遺構・遺物

白磁碗や大壺・滑石を多く含む鉢などの採集資料が報告されている。

#### ④ 参考・引用文献

知名町教育委員会1986『知名町埋蔵文化財分布調査 外報-昭和60年度-』知名町文化財報告書（5）

### (24) 花城洞穴（はなぐすく）

#### ① 遺跡の位置と立地

大島郡知名町に有り、島の南南東に所在し、島の最高峰大山周辺に多く見られるドリーネの1つで、付近にいくつかのドリーネを見ることのできる内陸部に位置している。洞穴周辺は森林に覆われ、石灰岩が点々と露出しており南西側と北東側に2か所に地下の鍾乳洞へ通ずる洞穴が開口している。両洞穴とも規模は同じくらいで、北東側の洞穴の方が、奥行きが深く鍾乳石および石筍群が良く発達している。鍾乳洞へ通ずる道は東西方向に急傾斜して、入口の前面部分は、石壁(自然石灰岩を補填する為に人工的に石積あり)がある。また、洞穴内には、町水道課の簡易水道施設が設けられている。

#### ② 調査の経過

「県営畑地総合改良事業」や、大規模な開発が進められており、埋蔵文化財包蔵地の保護に懸念が生じていた。そこで、知名町教育委員会では、遺跡の性格、範囲を確認する目的で分布調査を企画し、昭和60（1985）年に鹿児島県教育委員会と協議し、分布調査を依頼し、実施している。

#### ③ 主な遺構・遺物

分布調査では、土器、石器の遺物は採集できていない。入口から10m程度入った所に、鍾乳洞の左側テラス状の部分にゴホウラが確認されている。ゴホウラには穿孔があり、貝製品と推定されているが、時代は特定できていない。

#### ④ 参考・引用文献

知名町教育委員会1986『知名町埋蔵文化財分布調査

外報-昭和60年度-』知名町文化財報告書（5）

### (25) 赤崎洞穴（あーさき）

#### ① 遺跡の位置と立地

鹿児島県大島郡与論町麦屋にあり、現在、赤崎鍾乳洞として、観光スポットになっており、見学できるようになっている。洞穴入口がドリーネの底に開口している。洞穴の床は、入口から4～6mの下位にある。古生層と琉球石灰岩との不整合部に形成されており、主洞から北と南に洞穴が枝分かれして、北側は奥行き130mで、主洞とほぼ同じ方向に延び、高さ0.4～0.8m、幅0.5～1mである。南側は奥行き20mで比較的大きな広間となっている。

#### ② 調査の経過

日本大学探検部によって、昭和40（1965）年に発見されている。現在の赤崎鍾乳洞については、武永氏、九州大学探検部や、吉村氏・井倉氏の調査報告が記録されている。

平成30（2018）年には、鹿児島女子短期大学の竹中正巳氏が、新たな人骨が発見できないか、調査を行っている。また、竹中正巳氏・坂本稔氏・瀧上舞氏等は、洞窟管理者によって保管されていた左脛骨片の炭素14年代測定を行っている。

#### ③ 主な遺構・遺物

南側の洞穴から、多くの人骨が出土しているとされ、現在残る骨は、人骨が4片、動物骨が1片である。人骨は、左大腿骨2片（骨体上部が1片、骨体中央から下部が1片）、右大腿骨1片（骨体上部）、左脛骨1片（骨体部）である。すべての骨片に黒色物が付着している。

左脛骨片（性別不明・成人）について、炭素14年代測定の結果、中世のものであり、奄美群島の中世の埋葬において、赤崎鍾乳洞例は人骨と動物骨の関係を考える上で興味深い事例であると報告されている（竹中・坂本・瀧上2021）。

#### ④ 参考・引用文献

武永健一郎1973「珊瑚礁地域の地形」 武永健一郎 遺稿出版委員会

九州大学探検部1974「奄美群島調査報告書」

吉村和久・井倉洋二1981「赤崎鍾乳洞・奄美諸島 沖永良部島の洞窟」日本洞窟協会編集

竹中正巳2018「与論島赤崎鍾乳洞内で検出された人骨-調査速報-」『鹿児島女子短期大学紀要』第55号

竹中正巳・坂本稔・瀧上舞2021「鹿児島県奄美群島所在遺跡出土人骨の年代学的調査 喜界島花良治地区岩陰・与論島赤崎鍾乳洞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集

### 4 周知の埋蔵文化財包蔵地であるが発掘調査及び報告がない洞穴遺跡

ここでは、周知の埋蔵文化財包蔵地とされているが、詳細が不明な洞穴遺跡を紹介する。時期区分等は、鹿児島

島県埋蔵文化財データベースに従った。

#### (26) 岩屋洞窟 (いわや)

伊佐市菱刈楠元上岩屋前に位置する。それ以外の立地や遺跡の時期に関する情報は今回確認できなかった。

#### (27) 井穴洞窟 (いあな)

鹿児島市喜入町生見に位置する。古墳時代の洞穴遺跡とされている。

#### (28) 内山 (うちやま)

指宿市山川町成川に位置する。縄文時代中期・後期の洞穴遺跡とされている。

#### (29) 百堂穴 (ひゃくどうけつ)

志布志市志布志町安楽に位置する。縄文時代前期の洞穴遺跡とされている。

### 5 鹿児島県の洞穴遺跡の調査等の実態

29の洞穴遺跡について、遺跡の位置や立地、調査の経過、遺構・遺物、文献資料について、個別にまとめた。このことから、鹿児島県全体の洞穴遺跡の調査実態が把握できたので、まとめることとした。

鹿児島県内の洞穴遺跡は、29遺跡（本土16・島嶼部13）が確認されている。縄文時代とされるものが、のべ38遺跡（草創期1・早期6・前期10・中期7・後期9・晩期5）、弥生時代10遺跡、古墳時代4遺跡、古代3遺跡、中世6遺跡、近世2遺跡である。このうち何らかの調査・報告がなされている遺跡が19遺跡である。

調査については、鹿児島県の洞穴遺跡の多くは、河口貞徳氏の調査によるものが多い。河口氏は昭和20年代前半から鹿児島県内の多くの遺跡発掘調査を手がけ、1960年代に日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会が中心となって系統的な調査研究が進められたこともあり、洞穴遺跡の発掘調査も精力的に行っている。黒川洞穴（日置市）・鍋谷洞穴（始良市）・片野洞穴（志布志市）・中岳洞穴（曾於市）・ヨヲキ洞穴（伊仙町）・面縄貝塚（伊仙町）・中甫洞穴（和泊町）において、発掘調査及び調査指導を行っている。

近年は、奄美諸島にある徳之島の洞穴遺跡の発掘調査成果が著しい。特に伊仙町の面縄貝塚では、1930年代から調査が行われており、2016年には総括報告書を刊行し、現在までの調査・研究を総括している。天城町では、下原洞穴遺跡やコウモリイヨ一遺跡の調査を行っている。下原洞穴遺跡では、南島爪形文土器以前の土器文化があった可能性を指摘している。正式な報告はないが、ウンブキ水中鍾乳洞（天城町）は、7,000年前以上に水没した日本最大級の鍾乳洞で、その地底から縄文土器が出土している。

さらに、進歩の著しいDNA分析技術を用いて調査研究が行われている。その一つとして、日本人起源を再検

証する「古人骨新資料発見への取組と既出土人骨の資料化による南九州南西諸島域の人類史の解明」という調査研究が始まっており、南西諸島の古人骨分析が行われている。

### 6 あとがき

九州縄文研究会沖縄大会テーマ「洞窟・岩陰遺跡を考える」発表要旨・資料集の中で、鹿児島県の一覧表が抜けてしまっていたので、今回の一覧表で追記したい。また、今後、発掘調査や報告書作成・資料集の際の一助になればと思い、私の分かる範囲でまとめてみた。まだまだ洞穴遺跡や各遺跡の各遺跡の資料にて、不足している部分があるかもしれないが、判明した都度にアップデートできたら良いと考えている。是非、ご教示いただければ幸いです。

鹿児島県 洞窟・洞穴遺跡 一覧表

NO	遺跡名	所在地 市町村	発掘調査の有無	時代・時期											遺構	遺物		備考	
				縄文時代						弥生	古墳	古代	中世	近世		土器	石器等		
				早期	前期	中期	後期	晩期											
1	黒川洞窟	日置市吹上町	○	○	○	○	○								炉跡・埋葬跡・土坑	隆帯文・管畑式・春日式・阿高式・市来式・西平式・黒川式	貝輪・筭・骨針・貝製飾・獣骨	黒川式土器標式遺跡 県指定史跡(平成16年)	
2	権現洞穴	南九州市川辺町														周辺から土器や石器の破片が発見(詳細は不明)		県指定天然記念物 (昭和29年)	
3	福元洞窟	指宿市山川町	○					○	○						埋葬(人骨)	弥生土器	石器・銅鏡・骨角器・須恵器・骨製品・軽石製品		
4	山内洞窟	枕崎市							○							弥生土器(甕形土器)・磨製の石器		洞穴自体が弥生時代の住居跡とされる	
5	日木山洞窟	始良市	○		○										焚き火の跡と思われる焼土や木炭	深浦式	ハマグリ、コンダカガンガラ、ウミナ、炭化したカニ類のツメ、シカ、イノシシ		
6	鍋谷洞窟	始良市	○		○	○										塞ノ神式土器・鍋谷式土器・轟式土器	貝殻・獣骨	鍋谷式土器標式遺跡	
7	鍋倉洞窟	始良市	○							○			○			市来式土器・西平式土器・成川式土器・須恵器	鳥骨・獣骨・魚骨・室町～江戸の磨崖仏	戦時中 陸軍病院として利用	
8	口輪野遺跡	霧島市国分	○												住居跡・石組	晩期の土器片・壺形土器(重弧文)	貝殻・獣骨		
9	中岳洞穴	曾於市末吉町	○												炉跡・集石遺構	縄文後期後半の中岳式・西平式・三万田式・御領式および、晩期の入佐式・黒川式	礫器・片石器・スリ石・叩石・砥石・円形石器・石錘・石皿	中岳式土器の標式遺跡 市指定史跡	
10	花房峽助七洞穴	曾於市末吉町	○												土坑・焼土	黒川式			
11	片野洞穴	志布志市	○		○			○	○	○					敷石住居跡(轟式期)・住居跡(西平式期)や、排水用の溝	轟式・管畑式・岩崎式・市来式・西平式・御領式・黒川式・夜臼式等		釣針・カンザン等の骨角器市指定史跡(昭和60年)	
12	ホンドンガマ	鹿屋市串良町		○(縄文時代とのみ記載)						○						縄文土器・弥生土器・土師器(時期不明)			
13	塩屋阿獄	中種子町														甕形・鉢形土器		町指定史跡 (昭和56年)	
14	アナバトフル	奄美市笠利町												○					町指定史跡 (昭和46年)
15	イヤンヤ洞穴	奄美市笠利町	○		○											爪形文、条痕文、入来式土器類似	ゴホウラ製貝輪		
16	ウンブキ水中鍾乳洞	天城町	△	○												波状条線文類似土器			

NO	遺跡名	所在地 市町村	調査の有無	時期												遺構	土器	石器等	備考	
				縄文時代						弥生	古墳	古代	中世	近世						
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期											
17	下原洞穴	天城町	○		○	○	○	○								埋葬跡・焼土・廃棄土坑	南島爪形文・波状条線文・細隆線文	磨製石鏃・貝製品(貝鏃・小玉等)・魚骨製装飾品		
18	コウモリイヤー	天城町	○		○	○	○	○									南島爪形文・管畑式・喜界町総合グラウンド遺跡出土土器類似土器	磨製石鏃・貝輪		
19	ヨヲキ洞穴	伊仙町	○			○	○	○	○	○				○			条痕文・面縄前庭式・面縄東洞式・嘉徳式・陶質土器	サメ形加工品, 貝鏃, 貝製小玉, 獣骨, 魚骨, 甲殻類, 貝類		
20	面縄貝塚	伊仙町	○		○	○	○	○	○	○						石棺墓・集石遺構・竪穴遺構	南島爪形文・条痕文・室川下層式・面縄前庭式・春日式・市来式・面縄西洞式・面縄東洞式・嘉徳式	石斧・凹石・石皿・貝製品(鏃・装身具等)・骨製品	面縄前庭式・面縄西洞式・面縄東洞式の標式遺跡・国指定史跡(平成27年)	
21	中甫洞穴	知名町	○		○	○	○			○			○	○	○	土坑	南島爪形文・連点波状文・条痕文・青磁	磨石・敲石・石斧・貝製品・牙製品	県指定史跡(平成30年)及び有形文化財考古資料(令和2年)	
22	イクサイヨー洞穴	知名町	○	○(縄文時代とのみ記載)						○	○					風葬墓	土器	石斧・貝輪・タケノコ貝製品・人骨・鏡	新しい時期の風葬あり	
23	永良部洞	知名町	△														白磁椀・大壺・滑石を含む鉢			
24	花城洞穴	知名町	△															ゴボウラ製貝製品	時期不明	
25	赤崎洞穴	与論町												○				人骨・動物骨		
26	岩屋洞窟	伊佐市菱刈		不明																
27	井穴洞窟	鹿児島市喜入町													○					
28	内山	指宿市山川町				○	○													
29	百堂穴	志布志市			○															



鹿児島県 洞穴遺跡位置図

遺跡の番号は、本文及び一覧表の番号と同一





---

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第16号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2023年11月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail [maibun@jomon-no-mori.jp](mailto:maibun@jomon-no-mori.jp)

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

---